
見上げた空の向こうに

沖田蓮華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見上げた空の向こうに

【Nコード】

N5964P

【作者名】

沖田蓮華

【あらすじ】

8年ほど前から家族関係がうまくいっていない真希は、不当な扱いを受け、人に異常なまでの気を使うようになっていた。そんなある朝、見るからに不機嫌な男、柳イオリと出会った――。

序章

その日は、大きな店に家族全員で来ていた。

「これ可愛くない!？」

「あ、ホントだあ。欲しいなら買ってもらいなよ」

はしゃいだ女の子の声が服屋から聞こえてくる。

花柄だが、無駄に着飾ったイメージを持たせない服を、自分の体にあてながら姉が妹に話しかけていた。

「買ってくれるかな?？」

不安げな声は出すものの、顔は正直なのか微笑みながら姉が言った。それを、大丈夫だとフォローを入れた後、妹は姉と一緒に母のいる方へ足を向けた。

それを黙って見送った――真希は、ジーンズを見ている兄の方へと向かった。

「ズボン欲しいの? お兄ちゃんは」

浅く眉間に皺を寄せながら、なにやら真剣に考え込んでいる兄に声をかけると、

「...ああ。けど、あんまいいもん置いてねえな、ここ」

嘆息交じりな返答が返ってきた。

真希からしてみれば、ジーンズはどれも同じにしか見えない。しかし、色や生地が違うということぐらいしか判別ができない真希に比べて、兄はこだわりがあるのか、他のジーンズの方へと行ってしまった。

そんな兄をまた見送った真希は、一人ぼつんと取り残されてしまった。

人の多い休日は、何処に目をやっても人がいる。なのでもともとそんなに服に執着がない彼女は、更に人を気にしながらという条件の中で、服を選ぶことが出来ないでいた。

それから、ここでの買い物が終わったと告げられ、真希は家族と並んで歩き出した。

服屋を出ると、すぐ目の前に靴屋があった。服に興味はないが靴にならあると、真希は真っ直ぐに足を進めた。

自分の好きなチェック柄の靴がすぐに目に留まり、

「ねえ！ これ可愛くない？」

と周りの雑音に掻き消されないように、少し意識して声を上げながら家族を振り返った。

だが誰一人として、彼女を振り返る者はいない。

「……」

だが見知らぬ人から視線を向けられた。それも自分の家族に近い距離で。

聞こえていないはずがないのだ。そこにいる人が気付くのなら、その近くにいるみんなだって聞こえるはずだ。

しかし誰も——見向きもせずに歩いて行ってしまう。

真希は、そのままその場所に留まっていたてははぐれてしまうと思
い、走って追いかけた。

気づいたのは小学3年の頃。

誰に話しかけても——私の家の人たちは返事をしなくなっていた。

かえってくる時はいつも、その相手についてのときだけ。

何が原因なのかは、全く解からない。だからどう対処していいの
かが分からず、今年でもう8年目になってしまふ。

ただ1つわかること——解かってしまったことは、居心地の悪い
家になってしまったということ。

そして私は、高校生になってしまった。

壱

春つらら。

静寂に満ちた部屋で目覚ましの音が広がった。それに反応して、分厚い毛布の中にくるまっている物体からぬつと腕が伸び、時計の上にあるボタンを勢いよく押す。

一瞬にして音が止み、再び静寂が部屋を包み込む。

それから数秒後、やっと目覚ましを設定した本人がムクリと起き、三角の形でに座ったままぼーっとしてからベッドを出た。

彼女はいつも、時間ギリギリまで眠る。だからいつも遅刻する――というわけではない。

寝過ごしても遅刻しないように、計算しているのだ。

起きたらすぐに、学校に指定されている服に着替え朝食のパンが焼ける間に、母が作ってくれたお弁当を包み鞆にいれ、パンがいい具合に焼けたところで朝食にする。それが終われば寝ぐせのついている髪に櫛をとおし、歯を磨いて顔を洗う。それらが終わっても、家を出るまであと15分残っている。

シワにならないよう、家を出る5分前には制服を着るが、それまでする事があるのならそっちをするし、なければテレビのニュースを見ている。

おかげで、学校や友だちとの待ち合わせで「寝坊」を理由に遅れ

たことがない。

「ねえ、誰かあたしの櫛しらない？」

ただ一つ、遅刻をするのに理由があるのならそれは、

「ねえ真希」

家族たちによるものだ。

姉——梓は至極当然といったように、真希に問うた。

梓の発言には影響力があり、家の者たちが無視をするなんて事はありません、影でこの家を操っていると云ってもいいほどだ。

「——この間この辺りで…」

そう言いながら真希はテレビの前を探し始めた。逆らえばどうなるかは、既に知っているのだ。

むかし、梓に言われていた風呂の掃除をしなかったことがある。もちろん他意は無かった。ただ忘れていただけだったのだ。

しかしそれは言い訳に過ぎず、自分が机に向かってしていると梓は、

「あたし頼んだよね！？ 帰ってきたらすぐにお風呂入りたいから洗っというてって！！」

怒りをそのままに、机を思い切り蹴り飛ばした。

真希は驚いて肩をすくめ、

「…ごめんなさい……」

弱々しく言った。だがそれも梓の怒りを煽るばかりで、結局はそのまま洗わされることになった。部屋に戻ると、先程梓に蹴られた机の部分がくぼみ、割れていた。

元々木から出来ている分壊れやすかったが、あの一蹴りでここまですで大破するものだろうか、すぐに疑問に思った。その疑問は当然のもので、梓があの後、自分がいない間に壊れるまで何度も蹴っていたのだ。

「あ——あつたよ」

真希はそう言って梓に櫛を差し出した。

「そんなとこにあつたんだ。ありがとね」

櫛を受け取った梓は機嫌よく、洗面台の方へと行ってしまった。

それを見送り、溜め息を吐きながらもテレビの左上を見ると、既に家を出る時間は過ぎていた。

「…っ！」

真希は慌てて制服に着替え、何も言わずに家を出た。言ったところで返事など返ってくるはずが無いのだ。

8年もの歳月は、確かに彼女の心をえぐっていつていた。

壺（2）

往来で鈍い音が響いている。

路行く人々が、侮蔑の色を隠すことなく荒れ狂っている青年を見ていた。

それに気付いている青年は、目の前に転がっている男をいたぶることを中断し、

「見せモンじゃねえぞっ！」

じろじろと嫌悪感を丸出しに見てきている連中に、喉が張り裂けるほど荒々しく怒鳴った。すると先程とは一変し、そこにいた全員が慌てた様子ですれ違って行く。たった一声で張り詰めた空気に、怯えているのだ。

「糞がつ」

肩をすくめながら惨めに去っていく奴らにそう吐き捨てながら、先程までいたぶっていた男を振り返った。

しかしそこに男の姿はない。何滴かの血がそこにこびりついていくだけだ。

青年は男が逃げたのだと分かると、勢いよく辺りを見回した。後を追ってもう一度、道路に血がこびりつくまで遊んでやればいいと思ったのだ。だが望んだ男の姿は見当たらない。

——逃げ足だけは一人前かよ

あの一瞬で逃げ切っていることに感嘆しつつも、

「つつ…！」

舌打ちは自然としてしまう。

青年——柳イオリは、そのまま適当に歩き出した。本来ならば真っ直ぐに学校に向かうべきのところを適当に。

今年で高校3年になったものの自覚は全くなく、だからどうしたと、開き直っている状態だ。そもそも、その環境の変化にすぐについて来いという方がどうかしている。そう思えば、登校しようという考えもおこらない。

イオリは昔から気が短く、気に入らないことがあればすぐに手をあげる問題児だった。

本人もその事について改めるべきだと感じた時期もあったが、根が生えたようになかなか直らず、諦めてしまった。

そうして生きていると、当然そこらの不良や根っからのヤクザ者に絡まれるようになり、自然と力は上がっていった。今となつては、喧嘩は日課である。だが最近、今までよりも気が短くなったように、常に怒りがイオリに付きまとっていた。どうしてここまで腹が立つのか、そして感情を制御出来ない、など自分ではどうしようも出来ない現状にも腹が立つ。

「……俺にどうしろってんだよっ」

怒りのままにイオリはすぐ横にあるコンクリートの壁に、硬く握った拳を躊躇なく思い切り叩きつけた。

痛みはじわりとまわりに広がっていく。人を殴った回数より壁を殴った回数の方が断然多く、人を殴ったときの鈍い痛みよりも鋭く刺すようなその痛みは、はじめの内だけはイオリを大人しくさせてくれていた。だが、今では慣れてしまいなんとも思わない。

痛みによって自分を抑えることすら出来なくなっているイオリを、誰も止められないというのが今の現状だ。

「——……………ッッ!!」

叫び出したい思いを握りつぶし、殺気立ったまま、行く当てもなくイオリは再び歩き出した。

壺(3)

鞆を手に、真希は急いでいた。

毎朝、誰かしらの用事につき合わされてしまい、いつも学校登校には焦りながら走っている。今のところ、まだ遅刻せずにすんでいる。

家の者、特に姉である梓が一番厄介な人物だ。恐らく自分を一番嫌っているのだろう。何が原因で嫌われているのかは解からないが、きつとどこかで怒らせてしまうような事をしてしまったのだ。

昔はなんの変哲もない、普通の兄妹だった。楽しい事や面白い事があれば、どちらがともなく話しかけ、一緒に声を上げて笑っていた。普通に、喧嘩で言い合いもした。感動する事があれば一緒になつて泣いたり、怖い事があれば一緒に怯えていた。

だが今は、そんな光景を傍観する立場になってしまっている。

一緒に笑ったり泣いたりすれば疎まれ、怯えれば指をさして笑われる。喧嘩も、向こうが仕掛けてきたようなものばかりで、自分が反論すれば鬼の形相になったり手を上げたり……。仕舞いには他の者に、「私は何も悪くないのに」というセリフを入れて悪者扱い。

いつしか真希は、黙ってその所業全てを受け入れてしまうようになった。

泣く事も笑う事も、怯える事も全て。感情を表現する動作は相手に合わせてするモノになってしまったのだ。喧嘩になれば、もう誰

の手も煩わさないようにと、どんなに理不尽だと思っても口にせず、ただそのままを受け入れた。

弁解したところで誰も信じてはくれない。それどころか、聞く耳すら持とうとしないから。

そして、そんな環境で8年余りを過ごし、真希の感覚は完全に狂った。

だがそうしていれば、苦しまずにすむ自分がいることを知った。感情を殺し、しかし誰かという時はその人に合わせて色々な表情をして――、そこにたどり着いた……――。

暗い想いに耽りながらも学校へ続く道を走っていると、聞き慣れない、だが不安を煽るような鈍い音がした。ふとそちらに目をやると――、真希の行く路を塞ぐように背を向けた、少し長身の男の人が壁に拳をおいている。だが次の男の行動で、ただ置いているだけではないとわかった。

「……………ッッ!!」

咆哮とも雄叫びともとれるが、声を堪えているのか判別がしにくい。それでもあまり関わらない方がいいことは、一目瞭然だ。

真希は早く気持ちを抑えて、あきらかに不機嫌なその男が歩き去るのをじっと待った。だが、すぐの曲がり角を右に曲がったところで何かが落ちた。冊子のような、でもそれにしては小さいような。しかし彼は気づかずに行ってしまった。

「……………」

少し迷ったが、結局はそこまで歩いて近づいた。男の行った先を見ると、すでに影すら残っていない。そつと下を見れば、やはり小さな冊子が落ちている。誰に見られているわけでもなのだが、これではまるで泥棒のような気がしてなんだか居心地の悪い気持ちがする。だが、気づいておいて何もしないというのもまた気持ちが悪い。なにより後々、気になって仕方がない、なんて事になりそうだ。

ぶつぶつと考えながら拾うと、生徒手帳だった。確かに彼は学生服を着ていた。中を開いてもいいものかと悩んだが、結局は開いてしまった。たとえ小さくても好奇心には敵わないものだ。

「……私立稜鶴高校、柳イオリ」

知っている高校の名前だった。それも当然で、真希が通っている高校のすぐ近くにあるのだ。

「……」

逡巡と思いをめぐらせていると、聞きなれた音が耳に届いた。学校が閉門してしまうという意味のチャイムだ。——いわば遅刻。

真希はとりわけ焦った。角を左に曲がれば目の前に校門が見えてくるが、はやくしなければ門が閉まってしまふ。だが手元にあるこの生徒手帳も気がかりだ。

「——っ！」

悩んだ結果、真希は落ちていたすぐ近くの塀の上にそれを置いて門へと駆け出した。

誰かが何かしらの悪さを働くために持って行ってしまう、という可能性を考えれば、自分が持っているべきなのかもしれないが、本人が落としたことに気づいて戻ってくる方に懸けた。本音を言えば、見ず知らずの人のもの、それも第一印象が悪い人物のものを持つという行為は、なんだか阻んでしまうところがある。

少し申し訳ない気持ちもするが、だからこそ、あまり人目につかない影の方に置いておいた。

（——これであの人が気づいてくれれば）

こちらとしても安心できる。帰りにまだ置いてあるか確認しよう。そう心の中で誓い、真希は門をくぐった。

壺(4)

鉄で出来ている校門には、長年の雨風で錆びついている部分が多々ある。その門を通り越したところで真希は歩調を緩めた。それと同時に後ろから、ガチャンという大きな音が聞こえてくる。真希はその音に思わず振り返った。

そこには老人の男性が一人、校門を閉めようと力を込めているところだった。はじめてみた時は、ほっそりとしたその肢体では無理があるのではない、手伝おうしたところ、

「ああ、大丈夫だから」

と笑顔で断られてしまった。今も、すぐにでも手を貸したいと思うが、その男性はあっさりと門を閉めてしまった。校門の外側には、遅刻者となってしまった生徒たちが口々に文句を言っている。だがそれに彼は、

「残念だったな、お前たち」

と皮肉を言ってみせる。そんな余裕なところを見ると、見掛けによらず体力があるのだろうかと思う。

そして彼——松居は、門の向こうにいる生徒たちを背にし、真希の方を振り返った。すると、

「あんたは今日もセーフだな」

と残念そうに言った。皮肉とも取れるそれに苦笑しつつ挨拶で返

し、真希は校舎へと足を向けた。だがすぐに呼び止められてしまい、再び松居へと振り返る。

「なんでしょう?」

先程のチャイムと同じく、次のチャイムで教室に入っていないければ、結局は遅刻者扱いにされてしまう。次のチャイムまで15分あるが、松居が門を閉める姿を見届けていたために、すでに残り10分になっている。

遅刻と欠席だけは避けた真希としては、速く教室にある自分の席についてほっとしたい。

急く気持ちを抑えはするも、口調ははやくなってしまった。そんな真希に気付くことなく松居は、

「あんた今日は一段と顔色が悪いぞ。なにかあったのか」

と顎に手を当てながら言った。

なにかあったのかと聞かれれば——当然あった。毎朝何かしらの理由で突っかって来る姉はもちろんのことだが、今朝は思いがけず他にもする事ができてしまった。

真希は、殺気立ったまま歩いていく男の後姿を思い出した。

どうしてあそこまで怒っていたのか、理由は全くわからないのだが、近寄らない方がいいことは分かる。だがあの生徒手帳を目にしまった以上、少しは関わりを持つことになるだろう。

そう思うと、自然と気分は落ち込み、俯きかげんになってしまう。

そんな真希をどうとったのか、

「あんたも朝から大変だねえ。でもまあ若いんだから、できるだけ好きな事はしておいたほうがいいぞ。でないとワシみたいに、気づけば老いぼれ、なんてもことになっちまうからな」

と松居は楽しげに言ってみせた。励ましのつもりなのだろう。正直に言うことの出来ない人なのだろうかと思う。

前々から、むしろ初対面るときから真希を気にかけてくれる松居自分ではまったく分らないのだが、いつも顔色が悪いらしい。毎日、朝には可笑しなところがないか鏡を見るが、顔色に関してはなんともしない。朝から走っているせいではと思ったこともあったが、それならすでに体力がついているだろうと思ひ直す。

すると、無意識に頬に手を当てていた真希に松居が、

「おい、何してる。はやくしないと遅刻になるぞ」

と、とても重要な事を軽く言ってきた。その言葉に我に返った真希はすぐに自分が身に着けている腕時計に目をやった。

——次のチャイムまで残り3分。

真希は慌てて校舎へと足を向け、心配してくれる松居にお礼を言うのを忘れていた事にすぐ思い至り、振り返り軽く頭を下げてから、改めて校舎へと駆け出した。

そんな真希の姿を笑顔で松居は見送った。

「本当に……、面白い子じゃなあ」

心底楽しそうに言う松居には気づかず、真希は慌てながら校舎へと入っていく。

巻(5)

教室に入るとすでに真希以外のクラスのものは、友人たちと楽しそうに話していた。

にぎやかなその雰囲気にはっと胸をなでおろし、真希はさっさと自分の席に着いて落ち着こうと足を出した。

「きゃあゝ、まきいゝ！」

だがその一步を踏み出す寸前で、目の前から女の子が飛んできた。

「わああ」

急な突進に耐え切れず、体制を崩した真希はそのまま後ろへと倒れた。

思っていた以上の衝撃を背中に感じ、真希は声を出すこともできず苦渋の顔で上体を起こした。すると目の前に、先程飛び込んだ女の子がうつ伏せで自分の胸に顔を埋めている。呼吸以外の動きがまったく見られず、真希は困った。

飛んできた女の子――佐々木宇美は毎朝飛んでくる……。

ズキズキと痛む頭をさすりながら、顔を見ることが出来ない彼女を真希は心配した。

「大丈夫だった、宇美。どこかぶつけた？」

むしろ被害者は真希で、急に飛んできた彼女の方に非はあるのが真希はいたって真剣だ。

すると自分の胸に顔を埋めていた宇美が急にぶるぶると震えだした。どうしたんだと戸惑っていると彼女は、ぱつと顔を上げた。そのあまりの勢いに気圧される。

そして宇美は、感極まったと言わんばかりの眩しく輝く笑顔を見せてきた。

「完璧っ！」

急な発言のうえに、会話がかみ合っていないような気がすると思ひ首を傾げる。

すると更に大きな声が上がってくる。

「完璧よっ！その軽く傾げた感じとかすんごく気に入ってるみたいな優しい言葉、なによりも走ってきたと象徴するかのような髪の毛の乱れ具合っ！！」

完璧っ、と再度繰り返されたその言葉に真希は恥ずかしくなり、慌てて乱れていると言われた髪を手で梳いていく。

そうしている間にも、まだ自分の上に乗っている彼女は胸の前で手を組み視線を向けてくる。

どうしたものかと悩んでいると、上から聞きなじんだ声がした。

「はやく退いてやれよ宇美」

声のする方に目をやると、すぐ横にある机に男が座っていた。

宇美はちらつと彼を見てから、ぶっきら棒にわかってると返してから、真希の上から下りた。

彼女が無事に立ったのを見届けてから、真希もまた立ち上がろうとする。

立ちやすい態勢になったところで、横から手を差し出された。今度はなに、と思いその先を見ると、座っていたはずの男がすでに先に立っていた。

(い、いいの……?)

少し躊躇しつつ、真希はその手を取ろうと手を伸ばした。がすぐに、また横から新しく手が出てきて、男に伸ばしたはずの手を取られる。

驚いて上を見上げると、鋭い顔をした宇美と男がいた。

「触るな！ 汚れる」

「ふざんけんな。どっちかってえとてめえのせいで汚れるだろ」

「うるせえよ、てか消えろ。真希の目がにごむ」

「ばっか、にごむわけねえだろうが、お前が消えろ」

「ああ!？」 男はみんな汚ねえんだよ。よく見ろ、黒くにごってん

だろお前の手」

お前の目がにごってんじゃねえのなど、2人は負けず劣らずの口論を続ける。

おろおろと戸惑っている真希は、取り敢えずは立つべきだろうと思ひ、宇美の手にある自分の手を戻し、結局は自分で立ち上がった。制服についたゴミを叩き、改めて2人に目を向けると2人ともがこちらを見ていた。

「え」

想定外の状況に驚きの声そのまま出てしまった。

壺(6)

真希は席に着き、まだ冷える肩を縮めて寒さを凌ごうとしていた。冬を終え、やっと春が来たと思うがまだ寒さが残っているのでは、なかなか安心できない。冷え性の真希には、まだ着込んでいないと耐えられない季節でもある。

(せめて窓際の席が良かった……)

くじ引きとは言えなんだか悲しくなってくるなと思いつつ、冷え切ってしまったている手を机の下で摩りながら、真希は担任の朝の話を聞いていた。

宇美と男——吉田和雅の言い合いはなかなか終止符を打たず、終いには、真希が結局1人で立ってしまったことがそうとう気に入らなかったようで、その事について口論し始めた。

「おい、お前のせいで1人で立つちまったじゃねえか！」

「いいやつ、見るからにお前のせいだ！」

「あー、真希大丈夫？ちゃんとゴミ払った？汚れてない？」

最後は和雅を放置し、宇美が心配そうに、真希の制服にゴミがついていないかをチェックし始めた。そこで担任が現れ、一時休戦だと告げんばかりの鋭いにらみ合いでやっと終了されたのだ。

おどおどしながらそれを見ていた真希は、酷く申し訳なく思った。

せつかく差し出してくれた手を、自分がきちんと取らなかったのがいけなかったのだ。だから2人は喧嘩してしまった。

そう思う真希に反して現実には、ただ巻き込まれているだけにすぎない。だが真希自身はいたって真剣だ。それでも、事実とは違う理由で1人納得してしまった真希は、しょんぼりと眉を下げた。

（もっとちゃんと相手の事がわかるようにならなければ……）

そんな義務感を覚えながらも担任の話に耳を傾けていると、担任の低い声とは違う声が聞こえてきた。声を潜めているせいで、あまりうまく聞き取れないが宇美について話しているようだ。

「——いつもいつも、本当によくやるよね。あんな地味な女の何がいいんだか……」

「ほんと、毎朝飛びつく意味がわかんないよ。なんの特徴もない相手によくあそこまで入れ込めるわって、ずっと思ってたんだけど。あ、でもあの子、男相手だと口調変わるでしょ。あれウケる」

「あーそれすごい分かる、笑えるよねー。てかあの人、杉本さん？ いつも来るのギリギリだけど、部活してるわけでもないのになんであそこまでギリギリになるわけ？ あれ結構気になってんだけど」

あーそれあたしも気になってたー、といつの間にか自分の話しに変わっていることに気付き、真希は縮めている肩を更に締め、できるだけ誰の目にも留まらないようにと、無意識に体を強張らせた。

（私に特徴がないことや地味なことなんかは当然だけど、毎朝遅くに来ていることはそれ以上にきつと、私のせいだ……）

全部自分が悪いに違いない。そう自分に言い聞かせ、真希はこの場から消えてしまいたいという衝動を抑えようと、目を強く瞑った。

気付けば兄妹からも母親からもさげすまれるようになり、それが8年も続いたために真希の感覚は完全に狂っている。——すべてが自分のせいなのだ。

真希がまだ小さい頃に父親と別れた母は、4人の子どもを1人で育てていた。それなりに厳しい状態ではあったが真希としては、その頃はみんなと一緒に笑いあうことも出来ていたので毎日が楽しかった。

兄は勉強を教えてくれ、姉の可笑しい発言でよく笑い、妹の怖いものの好きに付き合っては、一緒になって怖がり抱きあったりもしていた。だがそんな毎日は、簡単に過ぎていった。

——そして一変。

兄妹はもちろんだが母親とも、今ではまともに話すことすら出来ない。

何が原因で、何がいけなかったのか？ 教えて貰う術を失ってしまった真希には、どうすることもできない。それからは毎日が絶望のような日々で、家族と話せないだけでこんなにも苦しいものなのだろうか、毎日ように思うようになった。

それでも、学校には宇美と和雅がいた。2人とは幼馴染で、どん

な時も一緒にいた。

和雅は、小さい頃はよく一緒に遊んでくれたが、最近では学校でしか会う機会がない。それでも、学校ではいろいろと気にかけてくれるし、きちんと話をすることも出来る。そして宇美はいつも隣にいてくれる。よく一緒に出掛けることもある。

そしてそれが、自分にとっての唯一の光。

家にいると、どうしても沈んだ気持ちになってしまう。だが2人のおかげで、何とか今を乗り越えている。

そんな2人にまで無視をされるようになるなど、想像出来ない。

背に伝う嫌な汗を感じながら、真希は強く想った。

（2人には不愉快な思いをさせないように、見捨てられないように、ちゃんと気をつけよう）

小さくなっている真希を、隣の席に座っている宇美は、目をそらさずにじっと見つめていた。

巻(7) (前書き)

全く気付かなかったのですが、お気に入り数字ができていました。
すごく驚きました。なんか、ptも入ってて…… (汗

ありがとうございますッ!!

今更ですが、まったくの初心者です。できるだけ丁寧に書こうと、
心がけていますが、それでもやはり、目に余ることが多々あると思
います。

ですが、どうぞこれからも宜しくお願いいたします。

壺(7)

春になると、多くのものが輝いて見える。以前の季節が冬だということも関係するのだろう。

冬は白のイメージが強くある。何もかもを埋め尽くしてしまうような景色。おちてくる雪は、良くも悪くも、いろんなものを包みこんでいく。

家々に挟まれた道を、イオリはひたすら歩き続けていた。

一時の間でも、自分の中でわだかまるモノ全てを消し去りたくて。

そして、彼女を見つけ出すため。

それはイオリの大切な習慣となっている。

どうしても怒りを抑える事の出来ないイオリは、できるだけ人と関わらないよう、ふらふらと歩き回る。それは、今までの経験の結果出した答えだった。

そしてその日も、ひたすら歩き続けていた。

この性格に引き付けられる者たちに、ろくな奴はいない。

それも当然だと理解は出来るものの、誰も好き好んで喧嘩をしているわけではない。

むやみやたらと絡まれては堪らない。

それも、本腰を入れたヤクザまで現れるのだ。できるだけ大人しくしているに限る。

だが、人と関わらないからといって全ての怒りが収まるわけでもない。すべてが苛立たしくて仕方がない。そう思う理由が、自分でも判らない。

そしてそんな時、何もない空中に手を伸ばす女がイオリの目に止まった。

黒く厚い雲に覆われている空からは、今にも雪が落ちてきそうだ。そんな空に手を伸ばす彼女が、異様なほど目についた。

膝下まである白いコート、その下から同じく白く細い脚が見える。愁いを帯びたその横顔は儚げで、彼女自身が白を纏っているせいか、今にも消え入ってしまいそうだ。

そしてイオリは、何故か眼が逸らせないでいる自分に気づいた。

そのあと彼女がどうなるのか、気になったのだ。

しかし彼女は、ただ軽く手を伸ばしただけで、すぐに腕を下ろしてしまふ。

それを見た瞬間、イオリの中で収まりかけた怒りが再び表へてきた。ただ、今の怒りはいつもとは違う。きちんとした理由があるのだ。

—— なにかを得ようと思って手を伸ばしたのではないのか？ 何

故すぐに下ろしてしまった。何故すぐに諦めた。

そんな押し問答が自分の中で繰り返される。

いつもならここで相手の胸倉でも掴んでいそうなイオリだが、今はそんな気分ではなかった。

相手が女だからか。

イオリはじつと、彼女を睨みつけた。

だがそんなイオリには気づかずに、女は伸ばしていた自分の掌を見つめ、強く握り締めた。

何か、大切なものを自らの手で壊してしおうとするような、そんな辛そうな顔で。

しかしそう思うイオリを残して、女はさっさと、何もなかったように、歩き去ってしまった。

イオリは、黙ってそんな彼女を見送った。

全てが儚げに見えた。彼女が消えてしまう。その一点において。

いつも怒っている自分が、こんなにも深く、彼女の世界に入ってしまったっている。その事実が、しばしの間イオリを大人しくさせていた。

沸き起こりかけた怒りが、急速にしばんでいくのが分かる。

いつもでは考えられない。ただただ、腹立たしい思いばかりをして来たのだ。それが急に消えていくかと思えば、また新たな感情が自分の中に芽生えている。いつもと違う感覚。

今のイオリには理解し難いものだ。

これまでに味わった事のないその感覚をどうすればいいのか、イオリは戸惑った。そして何気なく、彼女がそうやったように、自分の掌を見つめ、そして空へと伸ばしてみた。

——……オチツク……。

全てが無駄に想えてきた。感情に流される己すらも。

そして自分の手よりも遠くにある空に目をやる。——自然と心が和んだ。だがそれでも、自分の中でわだかまるものがある。

不可思議な感覚、そして未知の世界。

あの頃のように、イオリは空へと手を伸ばす。

今なら解かる。あの頃感じたものが、何なのか。

そつと手を下ろし、何かを取りこぼしてしまったような思いを引きずりながら、イオリはある場所に向かうため、再び歩き出した。

——彼女は今……

壱(7)(後書き)

やっと、ここまで来ました。

改めて読み返すと、イオリがただの変態にしか見えない…；

このままいくと、設定しておいたイオリの性格が崩壊しそうで、大丈夫かな？ と不安ですvv

そして私同様、

不安定な真希とイオリですが、出会ったあとはラブラブな予定です♪
ああ！ はやく書きたいっ

式

昼休み、お弁当と椅子を持参した上で、宇美は真希の机に向かっていた。もともと席が隣だった分、移動に苦労はないのだが、宇美の顔は何故か沈んでいる。

「どうしたの？ 大丈夫？」

真希にそういった事はないのだが、普通お昼になれば、誰もが「やっと昼が来たっ」と喜びの声を上げる。

この時間になればもうこそそと隠れて早弁をしなくても、有り難くお昼を頂く事ができるのだから、それも当然な事だと思う。

よく宇美は、学校に来た時点で「なんだかお腹空いてきた」と言う。自分のように走って来ているわけではなく、もちろん朝食を抜いているというわけでもない。

そんな宇美が、この時間を喜ばないことは不自然だ。

真希が不思議に思っていると、宇美は溜め息混じりに言った。

「だって……、この時間になるともうお腹空いてないんだもん。別に食べたいとも思わないし……」

どうやら、食欲もないのにせっかくのお弁当を口にする事を残念に思っているようだ。

確かにそれもそうだと、真希は納得した。

真希自身、もう8年も口を利いていない母親だが、それでも何故か欠かさず朝にはお弁当を用意してくれているので、いつも有り難く思い、残さず食べている。そして食欲のない日は、美味しく頂くことが出来なくて残念に思うのだ。

どうして無視されてしまうのかは分からないが、残せばそれこそ確実に喧嘩を売っていることになる上、それは本意ではない。

そんな事が頭の片隅にある真希は、できるだけ朝は食べないようにしている。

そして、朝早くからわざわざ自分のために作ってくれていることを、宇美も当然分かっていて。だからこそ残念に思うのだろう。

そんなことを思っているうちにも、宇美は早速お弁当を広げた。

「ああ、やっぱりおいしそう！」

さっきまでの沈んだ顔はどこへ行ったのか、嬉しそうにしながらどんどん口に運んでいく。そんな彼女を微笑ましく思い、真希も自分のお昼に目を向けた。

2段になっているお弁当の1段目はおかずだ。昨日の夕飯の残りや冷凍食品、そして必ず入っている卵焼きと野菜。

むかし、初めてのお弁当がすごく嬉しくて、きれいに洗われていくその横で聞いたことがある。

「ねえ、どおやってつくってるの？」

今思えば、とても普通なことを聞いていたと思う。だが母はそんな自分に笑顔で教えてくれた。

「んん？ それはねえ……」

あまりはつきりとは覚えていないのだが、今では考えられないほどの優しい笑顔だった。一番印象に残っているのは、

「でもやっぱり、一番大切なことは見た目よ。それも色合いが一番重要な」

という言葉だ。何やら必死になって答えてくれていたような気がする。そして母の言った通り、いつも彩りのいいお弁当に仕上がっている。

小さな思い出だが、真希にとっては酷く嬉しく、今となっては大切なものの一つだ。

今ではあの頃のように話すことはないし、恐らくこれからももう無い。

と、無意識に自嘲的な笑みになっていたようで、隣からすぐさま不思議そうな声が聞こえてきた。

「どうしたの？ 急に」

無意識だったため、宇美の言っている意味が分からない真希だったが、自分が何か可笑しい事をしたのだと悟り、何でもない、と首を横に振った。

宇美もそれ以上は突っ込まず、そういえばと、違う話題に変えてくれる。

「今日はいつも以上に遅かったけど、何かあった？」

まさか真希が寝坊なんてことはないだろうし、と付け加えながら宇美はどんどんお昼を頼張っていく。

「あー……、うんまあ……」

すっかり今朝のことを忘れていた真希は、宇美のその言葉をきっかけに思い出し、がっくりと肩を落とした。

いつも通り梓の用事につき合わされ、いつも通り慌てて家を出た。唯一いつもと違う事は、あの男の人。

明らかに不機嫌だった、という印象しか残っていないが、あの生徒手帳を思うと気にせずにはいられない。

男が去り際に落として行った生徒手帳を、取り敢えずは近くの目に付くところに置いては来たものの、本人が落としたことに気づいてくれたかどうかは謎だ。

帰りにちゃんと確認しておかなければ、と改めて頭に刻み込んだところで、ふとあることを思った。

（どうしてあんなに怒ってたんだろう……？）

後姿しか目にしていないのだが、男の纏う空気は遠目からでも張

り詰めているように感じた。そしてあの咆哮とも取れる声。感情を抑える事すらままならない様子だった。あそこまでの激情ともなれば、そうとうの何かがあの男の人にあったと考えるのが普通だろう。

いつの間にか箸の動きを止め、悶々と考え込んでいる真希の耳に、今度は楽しそうな声が聞こえてきた。

「もしかして……、『王子様』……？」

最後の『王子様』のところだけ、声を潜めて宇美は言った。それに真希は一瞬の沈黙のあと……ぽつと頬を染めた。

そんな真希の反応に気を良くしたのか宇美は、周りを気にしながらも、声を弾ませて言った。

「えっ、ウソ。ほんとに!？」

何故か嬉しそうにしている宇美に詰め寄られ、真希は頬を更に赤く染めた。そして、全く説得力の無いまま、宇美の期待に満ちた言葉を否定した。

式(2)

「いやー、よかったじゃん。今時『王子様』なんてそうそういないよ?」

これ逃したら次はないと思わなきゃ、という楽しい宇美の言葉を真希は必死に否定した。

「ち違うのツ、そういうのじゃなくて」

「で? どんな人なの?」

だが真希の言葉はあっさり遮られ、宇美は身を乗り出しながら更に聞いてくる。

先程から真希の否定の言葉には、聞く耳持たない、と言わんばかりの態度だ。おかげで、この状況をどう対処すればいいのかと、真希は混乱し始めていた。

そもそも、どんな人なのかと聞かれても、今の自分には答えられるようなものは何一つ持っていないのだ。だが、輝きをもった宇美の眼を見ていると、何か期待に込められるようなことを言わなければと、使命感のようなものが自分の中に芽生えるのもまた、事実だ。

未だにこちらを見つめてくる瞳に負け、真希は白状するように、目を伏せた状態で言った。

「……今日はじめて見かけたんだけど、すごく不機嫌な人、……でした」

我ながら惨めなものだと思う。

彼女の期待に応えなければ、自分は捨てられてしまうかもしれない。そんな恐怖に圧されるかたちになってしまったのだから。

そしてそのためにも、あの男の人の情報を知っておかなければならない。

しかし、真希自身は知りたいと思っていなかった。だから、彼女の期待に応えたい応えなければと思ったところで、本当に何も知らないのだ。

だがそれも、ただの言い訳に過ぎない――。

どう考えても今の答えは間違っていた。

彼女の期待に応えられなかった。

――殺される……ッ！

寒気がする。指先が冷える。怖い。

真希は、そう思わずにはいられなかった。

家の者でもないのに「怒られる」という脅迫概念に押しつぶされそうになり、自分を守るために目を硬く閉じ、身を縮めた。

襲ってくるであろう、痛みに備え。

だが予想していた罵倒も、酷い仕打ちもやってこない。それどこか、声すら聞こえてこない。

不思議に思い、怖いと訴える自分の心を押さえ込みながら、真希は恐る恐る宇美のいる方に目をやった。

（大丈夫、大丈夫、大丈夫。ここにいるのは宇美だから……、あの人達じゃないから……）

強く手を握り締め、覚悟を決める。

——鞆の中を漁っている彼女がいた。

「……………」

予想外というよりも、ただ呆氣に取られたと言った方が正確だ。

鞆の中に頭を突っ込みかねないほど熱心に、彼女はガサガサと物音を立てながら何かを探している。

「……………」

何か言った方がいいのか？ それとも何もせずじつとしているベキなのか？ など、宇美の不思議な行動に少し戸惑いつつ、真希はとりあえず後者を選び大人しくしていることにした。すると宇美が、こちらを振り返った。

「え、何？ なんと言った？」

半ば呆氣にとられていた為、反応が遅れてしまう。

宇美の声にはっと我に返った真希は慌てて、「ううん」と言ってみせる。その言葉に、そうと軽く返してから、宇美はまた何かを探し始めた。

今度はさほど時間もかからず、「お、あつた」と意地の悪い笑みを浮かべながらこちらに向き直った。手にはお菓子の袋がある。

「今朝家から持ってきたんだよねえ。真希も食べるでしょ？」

先程お昼を食べたばかりにもかかわらず、宇美は爽やかな笑顔で袋に手をかける。

一応、話をふって来たのは彼女の方なのだが、これ以上聞かれたところで、彼女の期待に応えられるだけのことは言えない。なら、この話はここで終わらせてしまうのが妥当だろう。

そう、一人納得した真希は、肩に力が入っていた事に気がついた。

（宇美の行動には少し戸惑ったけど、”こついうものなのだ”と受け入れてしまえば、大丈夫）

真希は差し出された袋にそつと手を伸ばし、口へと運んでいく。がしかし、

「不機嫌かあ」

心臓がはねた。

「——っ！」

聞いていたとは思っていなかった真希は、手にしていたお菓子を落としそうになった。

宇美がちゃんと聞いていたという事に驚いた上、お菓子を落としそうになり、真希は更に慌てた。まだ口に入れていなかったことが唯一の救いだ。もしそうだったなら、今頃咽て苦しい思いをしていたに違いない。

おどおどしている真希をそっちのけに、宇美は淡々としゃべり続ける。

「ううーん……真希の理想の『王子様』には程遠いね」

その言葉を聞き終えたと同時に、手にしていたお菓子が音を立てて潰れた。

そして、その喉につくような音に、真希は反射で身を硬くした。

（つつー！ど、どうしよう。ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい！）

だが、真希の怖い予想とは裏腹に、「大丈夫？」と、優しげな声が聞こえてきた。

真希は、ほっと息を吐き、改めて宇美へ謝罪した。

式(3)

すべての授業が終了し、今週の掃除の班以外は各々の目的地に向けて足を伸ばしはじめた。

すでに校門を後にした真希と宇美もまた、どちらとも言わず、それぞれに歩調を合わせながら歩いていた。

「そうだ真希、どっか寄ってかない？ ケーキ食べ行こうよ」

お昼、お弁当を食べた後お菓子を食べていたはずなのだが、まだ食べたりないようだ。

育ち盛りと言うものだろうか？ だがしかし、

「あ、えっと……ごめん、今日は用事があるから今度にするよ」

断る理由はあえて省き、真希はそう言い残して宇美と別れた。

いそいそと歩いていく真希の後姿を、宇美は寂しげに見送っていた。だがそんな思いとは裏腹に、

「あれ、絶対あの後ついて行ったら『王子様』に会える」

と小さく零した。

「——で？ 本気ですんのか、んなこと」

ふいに後ろから声をかけられ、宇美は横に振り返った。

そこには、乱暴に鞆を肩に乗せた和雅がいる。

「いつからいたんだ」という攻め文句は、面倒なのでこの際省く。

「いや、止めとく。今は」

そう言いながらも、宇美は真希から目が離せない。

彼女の望んでいる優しい世界が、どういったものなのか……。おおよその見当は着いている。

真希の様子が可笑しいと気づいたときには、すでに遅かった。

いつも明るく笑顔で、心優しい真希。だが今は、怯え苦しみ、人に合わせようと必死になっている。

——ある日、彼女から笑顔が消えた。

「何かあったの？」

そういくら問いかけても、彼女は応えてくれなくて……。とても腹が立った。

教えてほしかった。

——しかしすぐに、その日はやってきた。

真希が、家までやって来たのだ。

だがその姿はあまりに痛々しいもので、所々に擦り傷がある上、何カ所かに痣や内出血をしている部分もあった。それでも真希は、声を出すことも泣くこともしていなかった。

手当てを済ませてから少しすると、真希はポツポツと話し始めた。

途切れ途切れ、単語単語を口に乗せ、少しずつ少しずつ。

まるで、自分の感情が溢れださないようにと、気を張ったように。

真希の言った単語を繋ぎ合わせると、予想外の——いや、まだ小学生の時分、そんな事があるのは架空の世界だけだと思っていたのだ。それが現実には信じきれず、しかし実際に彼女の身に起きていて……、それを証明してくれるように、生々しい傷が目の前にあった。

彼女をここまで消耗させる事実が知りたいと思っていた。

そしてそれが分かったなら、手を貸して、力になりたいと望んだ。

もう一度彼女に、笑顔が映えるようにと。

だがそれは、自分にはどうしようもない事だったのだ。

「てか、なんでお前がここにいる。部活じゃないのかよ」

いろいろと思うところはあるものの、宇美は和雅へ向き直った。

彼が今ここにいるのは、おかしいはずだ。前に真希と話しているとき、野球部に入ると聞いていたのだ。その彼が今ここにいるということは考えるまでもなく、

「おかしいだろうが」

手を腰にあて、悠然と言つてのける宇美の目は、自然と鋭くなった。

一応、真希と同じく和雅とは幼馴染みなのだが、いつからか口を利かない仲になっていた。高校に入った今は、口は利くものの、何故か敵視しているようなことになってしまっている。

どうしても彼に突つかかってしまうこの状況を、どうしたものかと悩んでいるしだいだ。だが、そんな自分を知ってか知らずか、和雅はそれでも絡んでくる。

「ああ、ちゃんと入ってるぞ。幽霊部員だけど」

「幽霊部員つて……、気色悪」

じつと、目を逸らすことなく見てくる和雅に、こんな事しか言えない。そんな自分が齒痒くもある。だがしかし、

「なんか文句でもあんのかよ」

と言い返されれば、当然、

「んなもんねえよ、馬鹿。勝手にしてろ」

と言いつ返すしかない。

（ああっ！ 違う違うっ。こんなことが言いたいんじゃない……っ！）

ぶんぶんと大きくかぶりを振り、宇美は和雅をぎっと睨みあげた。

「で？　なんかよう？」

素っ気なく話題を変えてみる。「お前がふった話だろうが」と和雅がぼやくが、これ以上狂わされたくないので無視。

「いや、ただ帰ろうとしたらお前がここにいて、『王子様』だっついて行く』だとか何とか言ってたっただけだ」

とてもそのままだ。なんの変哲もない。

思い通りに事を運ぶということが、どれだけ難しいことか。

ここ最近本当にその通りだとよく実感する———といつかさせられる。

そう思うと、段々と腹が立ってきた。深い溜め息とともに全て吐き出せたなら、あるいは楽になれるのかもしれない。

（……なんか、疲れた……）

勝手に突っかって勝手に疲れて……。これじゃただの馬鹿だ。

宇美は、極々ありきたりな返答をよこして来た和雅を放置し、歩き出した。すると、すぐさま声をかけられる。

「おい、帰るんじゃないのかよ」

「お前に関係ねえだろ」と言いたいところだが、これ以上惨めな思いはしたくない。

宇美は舌打ちをした。

宇美が今足に向けているのは、家とは逆方向にある繁華街の方だ。当然といえば当然の疑問なのだが、今は声も聞きたくない心境だ。

「買い物っ！ ついてくんなよ」

本当について来るとは思っていないが、思わず口に出てしまった。

式(4)

夕日が部屋にあらわれ、真希は吸い寄せられるように窓に近づいた。

ついこの間までは受験生で、よく勉強もせずにふらふらと歩き回っていたことを思い出す。

その頃見た茜空とまったく同じ——ということはない。季節によって風景は変わるのだ。

そのことを実感しながら、真希は窓を開け放ち、すっと踊り場に出た。

(——柳イオリさん、来なかった……)

真希は頬杖をつきながらため息を零した。

「イオリ」という名前を、真希は密かに気に入っていた。奥ゆかしく、着物がよく似合う女性が連想され、なぜか考えているだけで心が和むのだ。

が、実際は不機嫌な男性、である。

頭の中で、「伊織」となってしまう真希は、はじめのうちは不思議な感覚を味わっていたが今は、

(男の人でもきれいに響く名前ってあるんだ)

なんてことを感じていた。

だがその名前を持ち歩いている彼本人に、真希はとうとう、本格的に関わることになりそうだと、諦めを感じていた。

放課後、宇美にまた「王子様」のことだからかわれると思い、真希は一人で生徒手帳のある場所へと向かった。そしてそこには、今朝から微動駄にしていないうろろそれが置かれていたのだ。

真希はその事実を胸をなでおろしてすぐに、がっくりと肩を落とすはめになった。

まったく関係のない人の手に渡らなかつたことには、素直に安心した。だがそれは、彼がここを訪れていない事、もしくは落としたことにすら気づいていないという、嬉しくない条件付のものだったのだ。

そして、

(…これは、……どうしたものか…)

と、この状況をどう打破すべきかと、悩む羽目にもなった。

結局、そのまま真っ直ぐ帰宅するのもどうかと思つた真希は、5分ほど彼が来ないかと待ってみた。

だがやはり、姿をあらわす気配はなく、今度は生徒手帳をじっと見ながら5分ほどを費やした。

（持つて帰るべきか、ここに置いて行くべきか……）

また、誰かが……、なんてことで不安に思い悩むぐらいなら、自分の手元に置いておくべきなのだろうと思う。だが、家に持ち帰ったところで、その不安を払拭できるとは到底思えなかった。

家には一応、一人ずつに部屋が与えられている。プライバシーを考えられてのことなのだが、真希にとってそれは、あまり意味のなさなものであった。

もともと、家に安心できるような部分はなかった。

家族とは、出来るだけ関わりを持たぬようにしている。

いつ何時、自分の身に何が起こるかわからない不安と、恐怖。

基本的に、自分の部屋からは出ないようにしてはいるものの、その部屋も、自分の居場所なのかと問われれば、「違う」と、答えるだろう。

その原因は、——妹の希乃だ。

毎朝、何かしらの理由をつけては突っかかって来る姉の梓もそうだが、自室の事について考えれば、妹の希乃が、一番の重要人物だと、真希は思っている。

理由は、希乃の癖になっちゃっている、盗みだ。

いつの間にそんなことを覚えたのか、幼い頃から真希の部屋に勝手に入っては何かしら物色していく。小さいころは鉛筆や消しゴム、

キーホルダーなどですんでいたのだが、成長するにつれてその癖は悪化していき、最近ではお金にまで手を出してきた。

そのことを考えると、むしろここに置いておく方が安全なのではないのかと思う。

長い間、悶々と考えた結果真希は、やはり家に持ち帰るのは危険だと判断した。

家に持ち帰れば、必ずと言っていいほどの確率で悪用されかねない。ならば、そうなるかもしれないという、憶測の段階ですむこの場所の方がまだ良いと思ったのだ。

（雨さえ降らなきゃ、きっと大丈夫……）

安心して物も置けない家。それもそれでどうなのだろうか、真希はそんなことを思った。

（普通の家なら、こんな心配をしなくても済むのだろうか。それとも……）

真希はその考えを振り払おうと、ぶんぶんと、大きく頭を振る。

——私はここで生きてきた。

どんなに痛い想いをして、どんなに辛い想いをして、だ。

誰も、わかってくれる人は側にいなかった。

そんなこの家で、真希は8年という歳月を過ごした。行く当てもなく、帰る場所もここにしかない真希は、それでもそんなこの家に縋って生きてきたのだ。

ここで、「安心して物も置けない家」について考えることは、今まで一人で頑張ってきた自分自身をも「変」だと思うことになるのだから。

空を仰ぐと、いくつかの雲が風に流され、その隙間から日が差し込んでいる。

優しいはずのその光を真希はいつも、自重した笑みを唇にのせて眺める。

これなら雨は大丈夫だろう。そう確信した真希は、部屋に戻り机に向かった。

式（5）

ほんのりと柔らかな風に包まれ黙々と歩く——それが、ここ最近のイオリなのだが、今歩いているのは家の中。それも現在ではあまり見かけない、昭和時代を思わせる一軒家である。

イオリはふと足を止め、横に広がっている久しい光景に眼をとめた。

やたらと広い庭には緑が生い茂り、なぜか池までもがある。

その池の中に魚がいるのかと、幼いころよく覗き込んでいた。だがいくら眼を凝らしても何もいない。普通、鯉ぐらいいるものだろうと、今でも思う。

外に面した長い廊下を、イオリは改めて進んだ。

長い廊下の先にある目的の部屋にやっとの思いで到着すると、上座の位置に着物を着た両親がいる。

父の一焼は胡坐をかき、腕を組んだ状態で下を向いていた。簡素な着物を着崩し眉間に皺を寄せている。固く目を瞑っているようだ。

そんな一焼とは対照的に、隣に座っている母の秋穂はにこやかにこちらを見ていた。淡い紫の生地には何匹かの蝶が飛び、長い髪もきれいに結い上げられている。

「お帰きなさい、イオリ」

ほがらかな空気を纏っている秋穂だが、その声は低く、よく響く。

イオリは黙って、2人の真正面になる位置に座った。

和を好む両親にあわせ、洋室は一つもない。どの部屋にも畳が敷かれており、家の中はどくどくの匂いで覆われている。

その匂いが不快でしかたがないイオリは今、更に不愉快な人物に呼ばれ、怒りに拍車がかかっていた。

秋穂の声に促されるように一焼がこちらに目をやる。いつもより増している鋭い眼光は、この男の場合無意識のものなのだろう。

「挨拶は」

腹の底に重くのしかかるような声に押され、イオリはしぶしぶといった態度で畳に手をつき、頭を下げる。

「お久しぶりです」

できるだけ感情を殺し、上辺だけの挨拶をする。頭を上げると目の前の彼女は、こちらをじっと見て笑んでいる。

イオリは努めて無表情を保ち、改めて父に向き直った。

両親が揃って自分と対峙するときの話題は決まって、

「イオリ、お前はこの家の跡取りであることをいつになったら自覚する」

家名のこと。

呆れるでも嘆くでも、怒鳴るでもなく一焼は重々しく言う。声音だけの問題じゃない。この男の纏う空気はいつも体全体に押し掛かってくる。それが鬱陶しくてしかたがない。

イオリはできるだけ険しい顔つきにならないようにと、口元を軽く緩めた状態で父を見た。

そんなイオリをどう思ったのか、一焼は深い溜め息をこぼし、射るような眼で見返してきた。

「この家にはお前しかない。わたしの後を継ぐのはお前だ」

拒否権はない、と言外に告げている一焼は、それが当然だとも思っているのだろう。

どんどん増していく苛立ちを腹に押し込み、イオリは感情とは裏腹に笑顔をつくった。通常のイオリでは考えられないほどの爽やかな笑みだ。

一焼の言う「継ぐ」とは、今、一焼自身が動かしている会社の事。

柳財閥。もともとは秋穂の父が興した会社だが、婿入りというかたちで一焼が手にしたものだ。そして今、それをイオリに継がせようとしている。

「ですから、高校にも入りました」

イオリは笑顔を崩さぬよう、気を配りながら言った。

「高校など当然だろう。義務教育だけで何ができる」

一焼の冷たい声が耳に届く。

イオリ自身、中卒でどうこうなるような会社でないことは分かっている。そしてその原因は、一焼の手中に収まってから会社の経営状況が右肩上がりであるということ。

（俺がこの男から席を譲り受けたとたん、それこそどうこうなっ
ては寝覚めが悪い）

しかしそれ以前に、イオリには継ぐ意思がなかった。

式(6)

「でも、イオリが高校には行かないって言ったときは驚いたわ」

自分と一焼の間にできた張り詰めた空気を、ものともせず一焼が朗らかな口調で言った。そんな秋穂に、一焼はすぐさま注意めいた事を言う。

「秋穂さんは甘いですよ。今こそ笑い話にできるものの、そんなことがあつてはあの会社がこの先どうなることか」

「ふふ、いいじゃないですか。今は笑い話にできるのでしょうか？
なら、笑つておかなきゃ損ですよ」

一焼の言葉を意に返さず、秋穂はにこやかに笑う。そんな彼女に降参だと言わんばかりに、一焼は溜め息をこぼした。

相も変わらず、この男は母に対して弱い。

楽天家な母の秋穂はいつも楽しそうに、朗らかに笑っている。むかしそんな2人を見て、何故父は母と一緒にになったのか、と彼女に聞いたことがある。いつ見ても、父の一焼は彼女に手を焼いているように見えたからだ。その時、そこに惹かれたんだと彼女は言い張っていた。だが実際に一焼がそう言ったのかどうかは謎なものだ。

ふと、その頃は一焼の言われるがままに動いていた自分を思い出す。

苦々しい記憶までもが甦り、イオリは思わず眉間に皺をよせる。

止まらない思考を、いつもならただ黙々と歩き回ることによって制御していた。だが今はそれができない。

増すばかりの怒りをどうにか押さえ込み、2人を注視していたイオリはこの流れでさっさと帰らせてくれないだろうか、と模索する。だがそれを読み取ったのか、一焼が再びこちらに矛先を向けてきた。

「お前、今日学校に行かなかったようだが、何をしていた」

瞬間、心臓を鷲づかみにされたような痛みと、高く鳴った鼓動が全身を駆け巡った。

背に嫌なものが滑り落ちる。

（――もう限界だ）

イオリはとっさに顔を伏せ、一焼に見られぬようにした。

今まで押さえ込んでいた怒りが今の一言で零れ出てくる。

膝の上にそえている拳を、爪が皮膚を食いちぎるほど強く握り、血が止めどなく流れ出るように奥歯を噛み締める。

怒りに肩が震えそうになるのを必死に堪え、下を向いた状態でイオリは笑顔を浮かべた。できるだけ自然に、違和感のないように――などと考えている余裕はすでない。

（――殺してやる。人が必死に押さえ込んできたモノに、軽々しく触れやがって……殺してやる）

その胸倉を息をつけないほどまでに締め上げて、しばらく動けない身体にしてやる。

実際、今の自分にはそれだけのことが出来る力がある。

が、そんな衝動に駆られているイオリを知らない一焼は再び、「何をしていた」と問いかけてくる。

怒りに支配されたイオリは、勢いよく面を上げた。

がその時、イオリの頬を冷たい風が撫でていった。それと同時に、記憶が甦り、イオリは息を詰まらせた。

先程とは比べ物にならない、手を伸ばしたくなるほど大切で、だけれど今にも消え入ってしまいそうな、儚い存在。

膝下まである白いコートを羽織り、同じく白い手を空へと伸ばす女。

彼女と同じことを自分もした。

そのとき感じた想いをもが、イオリの中に甦る。と同時に、あれほど強く感じたはずの一焼への怒りが急速にしぼんでいくのを感じた。

(……………)

だがそれを実感している暇はなかった。せっかちにも、一焼が声

を上げたのだ。

「おい、何をしていたのかと聞いているんだ」

低く圧し掛かる声に、イオリも負けじと声を張る。

「……また、監視させていたのですか」

先程までなら確実に怒鳴っていただろうが、今は冷静に返すことができる。

疑問の形になってはいるが、イオリには確証があった。

怒りに支配され始めたイオリは、周りにそれを感じずかれまいと「現状維持」を図った。成績や、教師や友人との間にある関係を保ち続けた。

すべては父の目を欺くため。

自分を社長の座に立たせようと必死な一焼の姿は、幼いころから見続けた。そんな父だからこそ、己の感情も制御できずにいる今の自分を、受け入れようとはしないだろうと判断したのだ。

だからこそその「現状維持」だったのだ。

だが一焼は、すぐにそれを見破った。そしてその証拠を掴まんと、監視役をイオリに送り込んできた。

一焼は一つ溜め息を吐いてから、口を開いた。

「お前がいつまでも子供だからだ」

世話が焼けると言いたいのだろう。顔に書いてあるとはよくいったもので、一焼は分かりやすい。

ギリ、とイオリが奥歯を噛み締めたとき、

「うそ、一焼さんったらまだイオリの追っ駆けやってたの？」

先程注意されたばかりの秋穂が、本気で驚いたと言わんばかりに、口元に手をやり体を仰け反らせた。

式（7）

「……追っ掛け……」

一焼は度肝を抜かれたように、驚き顔で秋穂を見ながら固まった。

「あら、違うの？」

そんな夫を見た秋穂もまた、驚き顔でイオリを見る。

そんな中、三角の形に集まった視線に呆れ、まるで一焼のようにイオリは溜め息を吐いた。

先程までの張り詰めた空気は、一体なんだったのか――。

一焼と秋穂、2人は基本的に仲がいい。喧嘩という喧嘩は見たことがない。いつも陽気な秋穂を一焼が正すという現場なら、腹が立つほど見てきたが――。ただ、いつも秋穂の雰囲気の流れ、最後には必ず一焼が折れる。そしてそれが今だ。

あながち間違っていない秋穂の言動にショックを受けた一焼は、がつくりと項垂れ、それを秋穂が苦笑しながら慰めている。

仲がいいのはいい事だ。イオリもはじめの内だけは暖かく見守っていた。だが、ここまで見せつけられては誰であろうと、段々怒りが募ってくるものだろう。

あまりに腹の立つ要素ばかりある自分の家に、イオリは貧乏揺すりもせずに耐えている自分を、偉いと宥める。

荒れ狂う己の心情。まるで、何もかもを飲み込んでしまう砂嵐のように汚い。このままでは、自分の中の何かが壊れてしまう。

そう思ったイオリは、深く息を吐いた。そして、今まで背を向けていた庭に目をやる。

（――まだ暗くなるのは早いかな）

自然と空へ注がれた眼に留まったのは、黒く厚い雲に覆われ、輝くことのできない夜空。そしてその先に見るのは――。

「あら、もうこんなに暗くなってる」

イオリにつられて空を見上げた秋穂は、無表情に空を仰ぐ息子に目をやった。

端正な顔つきの一人息子。長身で、誰が見ても認める美少年。しかしその心は歪んでしまっている……。

寂しそくに空を見ているイオリに、秋穂はできるだけ優しい口調を心がけて言った。

「もう帰きなさい。なんだか今にも雨が降ってきそうよ。それに、あなたの家はここから結構離れてるんだから」

これ以上暗くなる前に。そう秋穂が言い終わってから少しして、

イオリはちらりとこちらに目を向けた。鋭い眼光は一焼譲りなのか、眉間に皺をよせ、あからさまに不機嫌だと告げている。そんな息子に秋穂は微笑した。

「……失礼します」

無感情な声が部屋を満たす。

きれいな一礼を残して、イオリはさつさと部屋を出て行ってしまった。今だ負傷している一焼が、またなにか言いだす前に帰りたいのだらう。

一焼には目もくれなかった。

高校に入ったと同時に、イオリは1人暮らしを始めた。もともとこの家が好きでなかったことは知っていた。それでも、

「おもちゃがないと、つまらないわね」

そう想わずにはられない。

小さかった秋穂の声は、イオリには届かなかっただろうが、隣にいる一焼には聞こえていた。まだ完全には復活していないのか、ぼそぼそと、

「またそんなことを……」

と嘆いている。

「だって、一焼さんはいつも仕事ばかりでかまってくれないもの」

「だからってそんなことをあいつの前で……、もし聞かれたらどうするんですか。ただでさえ、嫌われているというのに……」

そういう横顔は、少し悲しそうだ。

「そう思うなら、あんな意地悪言わなきゃいいのに」

呆れてそう言うと、一焼は溜め息を吐いた。

もう癖になっているのかしら。そう思うと、2人でいる時間がどれだけ長いかを実感できる。

なんだか嬉しくなってきた秋穂は、無意識に頬を緩めた。と同時に、先程イオリが出て行った扉から、この家には似つかわしくないスーツ姿の男が現れた。

名は工藤。父の代からいる彼を、一焼は気に入ったようで、いつも側においている。

「失礼します。一焼様、いかがいたしますか」

「ああ……、今日はもういい。悪いな」

「いえ。では、失礼いたします」

工藤はそれだけを言うと、さっさと出て行ってしまった。そしてこの会話からすると、

「まさか、工藤さんにイオリの追っ掛けやらせてたの?」

「いけないんですか……？」

「いえ。一焼さんいつも彼を側においていたようだったから、少し不思議に思っ」

「あいつが一番信用できるんですよ」

「そうですか」そう笑顔で言おうと思った途端、足に重みができた。

一焼が頭を乗せてきたのだ。

少し驚いてから、秋穂は微笑み、そっと一焼の髪をなでる。透き通りがよく、さらさらと流れていく。

「もしかして、また妬いてくれます？」

そう聞いたものの返事は返ってこず、少しして穏やかな寝息が聞こえてきた。

秋穂は、緩む頬をそのままに、一焼の頭を撫で続けた。

参

リビングでは笑い声が絶え間なく響いている。

夕飯をすませた真希は、食器を持って、その笑い声に背を向けた。

ある日突然、父はこの家を出て行った。原因は不倫。

「要するに、母さんより大事だと思う女ができたんだろ」

そう言っていた兄の姿が目には浮かぶ。幼かった真希はその言葉にただ、

「ふうん」

そう返すしかなかった。

十分な感情が育っていない中でそんな事が起こると、客観的に捉えるしかなかったし、何よりも、今自分たちに起きている事を理解できていなかった。

そして母は、残された4人の子供のため、夜にも仕事を入れた。それでも家計は苦しいようで、

「こんなの、よくある話だよ」

そう、兄は言った。

少し憤ったように言っていたはじめに比べ、その時は悲しそうな

声をしていた。それが今でも印象的に残っていて、どれだけ時間が過ぎようと、複雑な気分になることに変わりはなかった。

ひんやりとした水で食器を洗いだした真希は、さっさと済ませるため、黙々と手を動かした。

夜にも仕事を入れた母には当然、夕飯を作るような時間はない。しかし幸いにも、兄の直紀は家事もそれなりに出来る年齢だった。そして直紀の料理は美味しく、なんの問題もなかった。母親と過ごす時間が減ってしまった真希を察し、進んで遊び相手もしてくれていた。

しかし、成長するにつれてそれぞれに好みが表れ、途中からは自分達で勝手に作るというシステムになった。そして食べ終わったものから、各自で食器を洗う。すべて梓がつくり上げたルールだ。

逆らうことを知らなかった真希も希乃も、従順にそれに従った。間違った考えでないことは理解できていたし、優しい兄を少しでも楽に出来るのならと、思ったからでもあった。

だから、今さら不思議に思うことなどない。—— ないはず。

簡単なパスタ料理ですませたので、真希の食器は1つしかない。それでも、リビングに背を向け洗い続ける。遠くから、梓と希乃の話し声が聞こえてきた。

「そういえば、この間大学の帰りにすごいイケメン見つけたの」

「へえ、イケメン……。それってこの辺りの人？」

「さあ、でもあの辺の道で見かけたの……。ほら、最近できたばかりの店。あの辺で見た」

「ああ、あそこ。で、性格最悪ってオチだったりしてね」

希乃は笑い声を上げながらそう言った。それに梓は、

「ああ、ありうる」

声を低くして答える。しかし、聞くともしに聞いていた真希は、

（ありうるの？ ……そういうものなのか……？）

と、まったくそういう事に関しての知識がないことを実感していた。それでも希乃の言いたいことは分かる。イケメンと言える人が滅多にいないということ。真希自身、そう思える人を見たことがない。

真希が洗い終わった食器を拭き、棚に戻していると直紀が現れた。目を合わさないように、意識して手元を見ていると、

「明日は雨だから、洗濯物増やすなよ。乾かなくなるぞ」

直紀は自分の食器を洗いながら、事務的な口調でそう言った。思いがけない発言に、思わず真希は直紀を凝視する。

直紀は、梓や希乃とは違い、自分を気遣うような言葉をくれる。罵倒したり八つ当たりをしてきたり、そんなことは一切してこない。小さいころと比べれば、大分差ができてしまうが、それでも直紀は家族の中で一番優しい。

(……………あ、…雨……………?)

茫然としながら、自分の中でその言葉を繰り返す。そうしていると、真希の視線に気付いていないように直紀がまた言葉をつむぐ。

「もう降り始めてる」

手にしている皿を落としそうになった。すぐに持ち直したおかげで無事だが、もし落としていたらと思うと恐ろしい。

しかし、今はそんなこと思っている時ではない。

帰りに置いてきた生徒手帳、自分の部屋から眺めていたきれいな茜空。それらが脳裏に浮かび、そして「雨」という単語と繋がる。いくら春といっても今は5月だ。来月からは本格的に梅雨に入るのだから、この状況は不思議ではない。

(速く取りに行かないと濡れちゃうっ)

そこまで想定していなかったため、一気に血の気が引き、体が冷えていく。そしてどんどん濡れていく生徒手帳が、頭の中で映像化されていた。

真希は慌てて布巾を側に置き、玄関に向かった。が、何故か直紀までもがついて来ている。すでにそれどころでない真希だが、追いかけてくる直紀の足音に脅迫されているような気がしてたまらない。

「おいっ。こんな時間にどこ行くんだ！」

「ごめんなさい。ちょっと取りに」

いつも怒ったような口調だが、今は確実に怒っているようだ。

直紀の手が視界をよぎったが、なんとか掴まれずにすみ、真希はそのまま逃げるように駆け出した。

参(2)

今日ほど酷い一日は無い。

なんで俺がこんな目に…………。

まるで己の心を表すように、空からは次々と雫が零れ落ちてくる。だがそれで気が晴れるわけがない。

雨の中、その男は肩を落としながら歩いていった。

ただ苛立ちを募らせ、雨に打たれながら道を歩いていく――。

今日は朝から気分が悪かった。

「ちゃんと食べてるの？ たまには連絡ぐらい寄越しなさいよ。つたくあんたは、そういうところは昔から」

「うるっせえなあッ！ 電話なんかかけてくんじゃねえよっ！ 死ね！！」

「なっ、お母さんに向かって――ッ」

男は、怒りに任せ、受話器を叩きつける形で戻した。そして、薄い壁では抑えきる事の出来ない怒鳴り声は、そのまま隣にまで響き、今度は隣から怒鳴り声が聞こえてくる。それをここ何年かで学習した男は、テーブルに置いていた折りたたみ式ナイフを手にとると、さっさと部屋を後にした。

男――忍は、「ボロアパート」の名がぴったりなそこに住んでいた。部屋には隙間風が入り込み、つい最近までは冬を乗り越えるのに必死になっていた。虫がわいて来るなどは日常茶飯事の事。

そうして、そんな環境に耐えられる者は限られてくる。

いつぞやに、テレビに出ているおばさんが言っていた。「周りの環境は、心にも影響を与える」と。

実際、あのアパートに住んでいるは、非社会的な人物が多い。

少し冷気を纏った風が、頬をかすめて行く。手をしまい、下を見ながら歩いていた忍は、しばらくして、所々傷のついた靴が増えてきた事に気付いた。

通勤者や学生が、次の居場所へと向かっているのだ。

そんな彼らの後姿を見て、忍は眉をひそめた。

(……胸糞悪い。どいつもこいつも、俺の前を歩きやがってッ！！)

忍は舌打ちをし、背を丸めながら歩く。

こいつ等は、何か勘違いをしている。

当たり前のように生きて、当たり前のように生活している。それがどれだけ、人の神経を逆なでしている事が。

忍は再び舌を鳴らすことで、理性を保とうとした。だが理性を活かした所で、何かが変わるわけでもない。

それをなんとなく分かっている忍は、抑えがたい破壊衝動に駆られる。

とそこへ、前方から明らかに不機嫌そうな人物が現れた。俯き加減に歩いているせいで、顔に影が落ちている。おかげで顔は全く見えない。

しかし、忍の足は止まってしまった。

(……なんだあれ……)

不機嫌なその人物は、ただ道を歩いているだけで、周りにいる者を牽制していく。

忍の知る限り、そんなことが出来る人間は、ヤクザかヤンキーだ。だが、今日の前にいる人物は、厳つい姿の連中を連れ歩いているわけでも、眼を飛ばしているわけでもない。

何もしていない。ただ歩いているだけ。

その纏っている空気だけで、人が離れて行く。

——すごい……。

尊敬の念すらあるその素直な感想が、忍の中に広がって行った。しかし、男に圧倒されている自分に気づいた忍は、居心地の悪い

気分で、すぐに止めていた足を進める。

意識して男を見ないようにし、忍は男とすれ違う。——つもりが、逆にそのせいで、男との距離を測り違えてしまった。

忍の肩が、男の肩にぶつかったのだ。

思い切り男の肩にぶつかってしまった忍は、そのまま後ろへと2歩3歩。しまったと思ったが最後、鳩尾に重い物が入った。

「つつがは」

身体に染み渡る激しい痛みが忍を襲った。

だが、痛みを感じている暇はなかった。息がつまり、胃液が逆流しようとして競り上がってくる。

忍は痛みをこらえようと顔を引き攣らせ、腹に手を当てながら、顔を上げようとする。

が、それよりも速く、右顔にまた、重い物が入った。

何の抵抗もできず、忍はそのまま壁に衝突する。

それと同時に、悲鳴がいくつか聞こえた。

今ので十分意識が飛んでいそうなものだが、なぜかまだ、頬に手を当てるだけの力があつた。

重くなった目蓋は左だけが上がり、一瞬焦点があわなかったものの、誰かの足が地面に落ち着くのが見え、はつきりした。

——先程の重りは、男の踵だったのだ。

男が、こちらに近づいてくる。

それを認めた途端、忍の背中を嫌なものが流れた。焦りが彼の背中を押す。

この男は隙を与えない。だから、反撃する事も逃げる事もできない。

そうして忍は、ただ、鉄の味と苦しみ、悔しさを味わい、逃げる隙をひたすら待った。

「見せモンじゃねえぞっ！」

男の怒鳴り声に、遠のきかけた意識が覚醒する。見れば、男は周りにいる者たちに向かって声を張っていた。

逃げるなら今——！

動こうとしない身体を叱咤し、忍はその場を後にした。

思い出すと更に腹が立つ。

止まない雨に肩を叩かれ、忍は帰路に着こうと歩いていた。

そもそも、肩がぶつかつた程度であそこまでするか？

はじめから機嫌が悪かつたにせよ、いきなり鳩尾に——それも思い切り——殴つてこないだろう。

そんな肩には、今雨が打ち付けている。たまに傷口に沁ることがあるが、それよりも忍は腹立たしい思いでいっぱいだった。

——あの男を見つけるまでは。

参(3)

夕方見た、あのきれいな茜空はなんだったのか。そう思うほど、夜の町並みは暗かった。その上、曇天に隠されてしまった月は、光どころかその姿を見ることさえ叶わない。おかげで、拍車がかかって暗く感じる。

いつの間にか、ばらばらと降っているものだと思い込んでいた真希は、今朝とまったく同じ形で通学路を走っていた。直紀の足音に、追い立てられているような気持ちで家を出、生徒手帳が心配で駆ける。そしてそんな自分を真希は、酷く滑稽に思った。

なによりも酷いと思うのが、

(うつゝ、傘忘れるなんて……っ)

濡れながら走っているこの状況。

雨が降っていると承知のうえで家を出たはずが、生徒手帳で頭がいっぱいになってしまい、傘が必要であることを完全に忘れていた。それでも、真希は手で視界を守りながら必死に前へ進んでいた。

一応、水溜りに気をつけて走ってはいるが、すでに何度か思い切り突っ込んでしまい、その行動はあまり意味を成していない。

これ以上濡れないためにも今から傘を取りに家に戻る、ということも考えたが、出る寸前に伸ばされた直紀の手を思うと、戻るに帰れない。それどころか、直紀は怒っていたのだ。

(そりゃ、こんな時間に外出なんて、許されるわけないか……)

真希は、今だ走り続ける自分の足を、黙って見下ろした。

無視され始めてから喧嘩という喧嘩は1度しかしていない。それはまだ小学生の頃で、その相手は妹の希乃だった。内容は盗み。希乃が、自分がいないことを良い事に、部屋に入り込み、机を漁って行ったのだ。

そのことに気づいた真希は、希乃を問い詰めた。

盗られたものは鉛筆。

ただの鉛筆ならまだ良かったものの、希乃が持って行ったのは、誕生日プレゼントに宇美がくれたものだった。可愛い柄だったため大切に置いていたのだが、希乃はわざわざその「可愛い柄」を選んで行ってしまった。そしてその鉛筆は、すでに希乃によって愛用されていたのだ。

勝手に使わないでよ。

そう怒鳴った自分を、希乃は鼻で笑った。そして冷たい表情で言っただ。

「たかが鉛筆で鬱陶しいのよ、馬鹿」

散々無視されてきたが、久々に会話が成り立った。しかし、その言動は明らかにおかしいものだった。そう思った真希は、たまたま休みだった母に希乃を叱って貰おうと、状況を説明した。だが返ってきたのは、

「鉛筆の一本ぐらい、いいじゃない。面倒くさい」

そんな冷めた言葉。まだ小学生だった真希に、その母親の態度は衝撃を受けるのに十分なものだった。

石を飲み込んでしまったような不快感。

だが――毎日仕事付けたから……、そう自分に言い聞かせれば、泣きそうになる己を戒めることができた。

それから真希は、せめて謝ってもらおうと思い、再び希乃に詰め寄った。だが、出かけていた梓が帰ってきたことによって、それがなされる事はなかった。

帰ってきた梓は、何故か不機嫌だった。そして希乃に怒っている自分を見ると、おもいきり蹴り飛ばした。そんな行動など考えもしていなかった私は、あっさり倒れてしまう。

だが今思えば、例えその行動を先読みし、臨戦態勢に入っていたとしても、自分に勝ち目などなかっただろう。なにせあの頃の自分は、まだ小学3年生。対する梓は、高学年の6年生だった。そんな相手が、本気で、それも躊躇なく蹴りを入れてくるのだ。適うわけがない。

抵抗できず、痛みで抗う事もできない真希を、再び激しい痛みが襲う。

——恐怖

どすどす、と絶え間なく続く音と痛み。そんな中、必死で顔を上げると、そこには何故か梓だけでなく希乃までもがいた。

梓は八つ当たり、希乃はそれに便乗している形だった。

誰もいない中、止める者など誰一人としておらず、2人は疲れるまでそれを止めなかった。

それを初めとし、梓と希乃は機嫌の悪い時に自分を見ると、罵倒をあげせたり暴力に出たりするようになった。そうすることで、ストレス発散になっているのだろう。

だがそんななか、直紀は傷だらけになった自分を黙ったまま、手当てしてくれた

しかしそんな優しい直紀を、今回自分のせいで怒らせてしまった。いつも怒ったような表情だが、今まで怒っている姿を見たことはなかった。

(それなのに、……………)

真希はぎゅっと目を瞑り、酷く申し訳なく思う自分を払い除けよう頭を振った。

謝る本人もいないのにそんな事を思っても、詮無いこと。そう頭では理解できるものの、やはりとても申し訳ないと思う気持ちがある。

自然と真希の視線は下に落ちる。

止まらない脳の働きぶりが、今は恨めしい。この思考回路がたった一度、一瞬でも停止してくれれば、自分は、こんなに必死になつて走ったりしていなかったはずだ。

従順に今の環境を受け入れ、あのまま布巾をきちんと片付けて、部屋に戻っていたはず。

そう思いつつも走り続けていると、釈然としないままではあるが、真希の足は目的地へと到着した。

今だ止む気配を示さない空に目をやれば、厚い雲がそこにはびこっている。次に、昼間自分の意思で置いてきた、生徒手帳のある場所へと視線を移すと――、そこには彼がいた。

思いがけない彼の登場に、真希は覚えず瞬きを忘れ、1歩後ずさった。

（――どうして……あの人……）

そこには今朝初めて見た、不機嫌な彼の、柳イオリの横顔あった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5964p/>

見上げた空の向こうに

2011年12月20日22時48分発行